慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	阿部隆一先生を悼む
Sub Title	
Author	松本, 隆信(Matsumoto, Ryushin)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1982
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.19 (1982.) ,p.441- 444
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	阿部隆一名誉教授追悼記念論集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000019-0441

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

阿部隆一先生を悼む

前文庫長阿部隆一先生は、昭和五十八年一月二十二日朝、慶應病院において逝去された。前年の秋頃からお身体の不調を訴えられ、十二月に入院して検査を続けていたのであるが、一月なかばに俄に病状が悪化し、ついに不帰の客となってしまわれたのである。昨年三月に満六十五歳の定年を迎え、本塾を退職して名誉教授となられた後も、斯道文庫講座と文学部の講義をお願いし、十一月までは毎週お元気な姿に接していたので、このような事態がくるとは、身近にある者の誰しも、予想もしないところであった。

阿部先生は、大正六年福島県に生れ、昭和十六年十二月、本塾文学部哲学科を卒業、十七年四月から文学部助手として本塾に勤務された。二十年四月には、請われて福岡にあった財団法人斯道文庫の研究嘱託を兼ねることとなり、先生と斯道文庫との長い関係が始まった。斯道文庫は昭和十三年に麻生産業株式会社社長麻生太賀吉氏によって、日本および東洋文化の研究のために福岡市に設立された、当時西日本唯一の人文科学の研究所で、終戦まで短い期間であったが、研究と蒐書に、その活動は学界の注目を浴びたと言われる。しかし、昭和二十年の福岡空襲の際に斯道文庫も災に遇い、幸いに蔵書の大部分は戦禍をまぬかれたものの、戦後の状況の下では研究活動を続けることが困難となって、閉鎖のやむなきに至った。先生は、残された蔵書管理をゆだねられて、本塾をいったん退職し、福岡にあってただ一人文庫を守っておられた。その当時に先生の作られた斯道文庫の蔵書目録は、現在も文庫の目録の基本をなすものとして活用されている。

その後、二十六年に蔵書が九州大学に一時寄託されたのを機に、再び本塾に戻られ、暫く野村兼太郎図書館長の許で和漢書の司書の職にあって、和漢の貴重書の蒐集に精力的に当たられた。当時は戦後の社会情勢の急変に応じて、古典籍が市場に大量に出回った時期であり、これを逸せずに本塾図書館の和漢貴重書を充実せしめた先生の功績は、今顧みて誠に多大であったと言わなければならない。それと共に「慶應義塾図書館蔵和漢書善本解題」を執筆され、昭和三十五年、私立大学図書館協会賞を受けられた。

一方、斯道文庫の設立者麻生太賀吉氏は、人文科学の研究機関として文庫を永続させるためには、しかるべき大学に蔵書を寄付し、それを基礎に新な研究を育てるのが最善と考えられ、折から創立百年を迎えた慶應義塾が選ばれて、三十三年には全蔵書が寄贈される運びとなった。これも、文庫の閉鎖期間中、留守を預った先生が、単なる管理でなく、七万冊に及ぶ蔵書の正確な目録を作製したことに見られるような、書物に対する情熱を汲まれた麻生氏が、先生に全幅の信頼を寄せられていたことが、大きな機縁になったのであろう。

蔵書の寄贈を受けた本塾では、その趣旨に添う方法を検討した結果、三十五年十二月一日を以て、大学付属研究所斯道文庫を設置することとなったが、その設立に当っては、先生は事実上の責任者として、研究所の基本的な性格づけ、機構や事業の策定に預った。戦後の私立大学の財政事情の中で、新しい研究所を作るのは容易ではなく、諸方面との折衝に奔走したご苦労は並たいていではなかったと推察される。こうして研究所が設置されるや、先生は専任助教授兼主事に就任し、四十年には「室町以前邦人撰述四書孝経注釈書考」によって文学博士の学位を授与され、教授となられた。以後も五十一年まで主事を兼ね、五十三年には文庫長に推挙されて、退職まで研究所運営の重責を荷ってこられた。まさに今日までの斯道文庫は、先生の強力な指導力によって発展の道を歩んできたというべきである。

研究所斯道文庫は、日本と中国の古典に関する原資料の蒐集調査を事業の根幹としたが、蒐集の方法に、諸機関に

先立って、マイクロフィルムによる副本作製を提唱したのも先生である。そして、発足と同時に、文庫員の先頭に立って、特製の百フィート用カメラを携行し、各地の図書館・文庫・社寺をめぐる訪書の旅が始まった。どこでも山と積んだ本を前にして、片端から書誌をとると同時に、傍では、それを次々に撮影してゆくのである。夜、宿に帰っては、我々がその日にとった書誌のカードを一つ一つ点検され、厳しい注意、指導が加えられる。文庫員は、それぞれ自分の研究テーマをもっていたが、自分の領域の本だけでなく、国書・漢籍にわたって、いろいろの本を見ることを要求された。そうしなければ、本物の書誌学はできないというのが先生の持論であった。こうして、私をはじめ文庫の研究員は皆、先生に手をとられて実地指導を受け、それぞれの領域における文献学的研究の基礎を築くことができたのである。

先生が文庫の主事、さらに文庫長を勤められた期間は二十年の長きにわたったが、その間、上記のような学問上の指導にとどまらず、不足がちな研究経費を補うために、賛助員会を組織しての募金や、官私の助成金集めに、並々ならぬ労苦を払われたほか、研究成果の出版等の交渉も、ほとんど一手に引き受けてこられた。さらに、河村文庫・亀井家学文庫・平岡文庫・松林文庫・坦堂文庫・コルディエ文庫等、諸家よりの寄贈、寄託図書の受入れも、みな先生の尽力によるものである。文庫の運営も、ひとえに先生の精力的な活躍に負ってきたといって過言ではない。

先生個人の研究業績は、後掲の著述、論文に明らかな通り、和漢書誌学のきわめて広い領域に及んでいる。当初は日本儒学の研究を志されたといわれるが、その基本資料の再検討の必要性を痛感されて、広く写本・刊本の書誌学を中心とする研究に入られた。それは非常に徹底したもので、現存資料を博捜網羅した上で、諸本の厳密な比較校勘を行い、諸本の伝流を明らかにするところにあった。斯道文庫においては、邦人撰述漢詩文集類、邦人撰述漢籍注釈書類、日本現存漢籍古写本、宋元版本、等を主要な研究対象として、資料の蒐集に、国内のみならず海外にまで足跡を

伸ばす活動を続けられ、その成果を次々と発表されてきた。先生の論文は、多く諸本の書誌解題の形をとって発表されているが、そこには書物を通じての文化、思想の流れが適確に把握されており、書誌学に独立した一科の学問としての位置を確立したものであるとは、東洋文庫長の榎一雄博士がかねてから高く評価されていたところである。

先生が晩年に最も力を注がれていたのは、五十二年に朝日学術奨励金を受賞された「宋元版の研究」である。既に資料の過半を蒐集し、その一部は「日本国見在宋元版本志経部」として斯道文庫論集第十八輯に発表されたが、これが大部の論文としての絶筆となってしまったのは、実に惜しんでも余りある。また、それと並行して、五十三年からは、トヨタ財団の多額の助成を得て、漢籍総目録の編纂という遠大な事業にいどみ、一部の試行を経て、昨年の退職後は、いよいよそれに全力を注ぐべく、組織作りと計画の具体化に乗り出された矢先であった。先生の無念はいかばかりであったかと察せられる。斯道文庫は先生が一生を通して情熱を傾け、手塩にかけて育ててきた研究所である。我々としては当然、先生の遺志を継いで、その遠大な計画を文庫の事業として継承し、着実に実行してゆく責務を痛感している。

昭和五十八年三月

松本隆信謹識